

IWO-JIMA 体験 My Memory of Visiting Iwo-Jima

ニューガラスフォーラム

専務理事 上杉 勝之

Katsuyuki Uesugi

Executive Director, New Glass Forum

1. きっかけは一本の電話から

今年、日米開戦 66 周年だそうです。「そうです」と言うのは、戦後生まれの私にとっては、太平洋戦争は歴史として頭でしか理解し得ないからだ。しかし、今も元気な私の父親を含む兵隊経験者や、当時の国民にとっては、生きている限り、あの戦争は過去ではあるが、まだまだ歴史ではない。いや、あの戦争が歴史となる最小限度の条件は、世界中であの大戦中に生を受けていた者がすべてこの世からいなくなるという、生物的な事であると私は思っている。かく言う私が、今となっては昔の、平成 2 年に硫黄島体験をしたので、以下に、その思い出を記す。

私が、NEDO の池袋本部へ出向して 1 年 4 ヶ月が経った時、通産本省の幹部から電話をもらった。その上司は、「君は防衛問題に関心があるかね？」と直線的に言う。私も、「大いに興味があります」と手短かに答えたところ、その幹部は「ああ、そう」と言っただけの簡単なやりとりであった。数日後、その幹部からもう一度次のような電話があった。「実は、2 週間の防衛研修があるのだが、君を推薦しておいた。

〒104-0005 港区新橋 2-12-15
TEL 03-3595-2775
FAX 03-3595-0255
E-mail: uesugi@ngf.or.jp



小牧基地で待機する C-1 輸送機

君の人事異動はそれが明けてからと理解しておくように。マァ、気軽に勉強のつもりで行って来たまえ」と予想もしない内容であったため、人事異動とどんな関係があるのだろうかと思いつつも、好奇心一杯で参加した。

研修は以下のようなものだった。

①期 間：1990 年 7 月 10 日～27 日

②場 所：防衛庁研究所

(目黒区恵比寿駅から歩いて 5 分ぐらいのところにある広大な敷地内)

③メンバー：41 名 (防衛庁・自衛隊 32 名、各省庁 9 名 (総理府、内閣審議官、法務、警視庁、外務、通産、建設、自治、海上保安庁))

④日 程：7 月 10 日～26 日はソ連、朝鮮半島、中国、欧米状勢などの座学。

うち、17 日が硫黄島、24 日が陸上自衛隊富

士学校での戦車試乗を含む現地研修。

なお、自衛隊参加メンバーは一佐から将補クラス。昔で言えば、大佐から少将である。ちなみに、私は自衛隊では一佐だとのこと。これは連隊長か戦艦の艦長に当たるようだ。

2. 硫黄島戦史

(1) 概要

硫黄島は、東京から1,200 km強のフラットな島である。当初、7万の米軍が、5日もあれば占領できると予測したにもかかわらず、ここで、栗林忠道中将（戦死後大将）は、昭和20年2月17日から3月26日の玉砕まで、実に1ヶ月以上にもわたって戦い抜いたのだった。

栗林中将は、最大の敵、水不足に苦しみながらも、30～60℃以上の地熱地盤内に、総延長18 km張り巡らしたトンネル陣地で、全軍をよく統率して戦った。

戦いの結果は次のとおりであった。

日本側兵力：20,933人

(戦死 20,129人)

米側損害：28,686人

(戦死 6,821人)

(2) 日本軍にとっての硫黄島の役割

昭和18年までは、同島はマリアナとの航空中継基地。昭和19年頃は、マリアナ決戦における洋上撃滅のための北方航空基地。サイパン陥落後は、本土防衛の前衛拠点。



飛行中の輸送機の内部

(3) アメリカ軍からみた硫黄島の役割

B-29は航続距離が長いので、サイパンから東京空襲を行えたが、より正確な命中率を得るためには低空爆撃が必要であった。このためには、B-29を護衛する戦闘機が必要であり、足の短い戦闘機基地として、サイパンと東京の中間に位置する平坦な地形の硫黄島は、戦略上重要な拠点であった。

3. 平和基地・硫黄島訪問

島には自衛隊の他に、わずかな米国海兵隊員が駐留するだけで、一般人は一切立ち入り禁止である。我々は、名古屋の小牧航空基地から、自衛隊が当研修のために用意してくれたプロペラ輸送機C-1で朝8時30分に飛び立って、2時間30分で硫黄島着。この飛行機は、湾岸紛争の時に派遣が検討されたものと同じような型だが、むこうの4発に対し、こちらは双発機である。我々約40名は、横一列のビニール革でできた簡易座席に並んで座る。首に2枚の身元識別札をクサリでつるされた。墮落時の捜索で発見した際に、1枚を口に突っ込んで身元確認用とすると言う。機内は配線がむき出しで、方向舵を動かす銅線が音をたててその都度動くのが見える。上空に至ると温度低下のためか酸素吹出しが霧状になって機内に一瞬広がる。エンジン音もうるさい。車に例えると、トラックの荷台に乗っているようなものだ。

基地に着くと、冷房のきいた大部屋で、白服に半ズボン、白ヘルメットといった南洋島勤務服のようないでたちの幹部から挨拶を受けたあと、2台のマイクロバスで島内巡回に向かう。最初に島の北端の高台に立つ慰霊塔に参拝。直下にある洞窟陣地に懐中電灯で入って行くと、温度は30数度。ここは外部との通気口があるのでこの位の温度ですむが、なければ地熱のため60数度を超え、とても10分とは居られない。サウナそのもので汗がふき出す。だからトンネルを掘った時は、硫黄ガスもあり、一人が1日5分ぐらい働くのが限度で、あとは地上

で休むだけだったそうだ。そうしないと、後日の体力が続かなかったという。それにもまして、ここに展望もなく立てこもって抗戦したかと思うと、そのすさまじさは全く想像を絶するものであった。

東海岸の波打際近くには、ロスアンゼルスオリンピックの馬術で優勝した西竹一中佐の碑がある。彼は755名、23両の戦車隊を率いていた。

米軍が上陸した平坦な海岸線に沿った路を通って、南端部の標高169mの摺鉢山へ向かった。頂上の一部は米軍の艦砲射撃により、確かに外輪の一部が50mぐらい吹飛んで欠けたままとまっている。が、頂上が吹き飛ばされるほどの艦砲射撃と聞いて想像していたよりは、崩れ方が小規模であった。頂上には日本の慰霊碑と共に、50mぐらい離れたところには米側の記念碑もある。星条旗をこの頂上に立てようとする米兵6人を写して、ピューリッツァー賞を受けた有名な写真が、その表面に浮き彫りされているのが見えた。たまたま、そこには沖縄から飛来した迷彩色の戦闘服の米国海兵隊員30名ほどが、何やら上官から説明を受けているのに出会わせた。そこは、彼等にとっては戦勝の教訓を現役の兵に与える格好の地であるには違いないが、我々にとっては、日本の敗戦と悲惨な死を遂げた兵士達の鎮魂の場所であった。彼等に近づいて、その一人と短い会話を交わした。彼等は一泊すると言う。我々は貴重な水を浪費しないよう、日帰りしなければならない。その白人の若者は毛むくじゃらな太い腕で、180cm以上ある巨漢。気さくで、愛嬌のある彼と握手した時、こんなに肉体差のある連中とはとても戦えないな、と瞬時に感じたが、そこから、自然と、当時の日本兵達の絶望的な白兵突撃を生々しく思いおこされてしまった。

頂上から見渡すと、平らな島は一面緑に覆われ、海は青く、波が作る白い海岸線で島全体がぐるりと囲まれている。来る前に私が想像していたのは、「地熱でくすぶる茶色の荒れ果てた

ハゲ島」であった。しかし、どこにもそんなイメージを湧かせるものはなかった。亜熱帯の平和島そのものだ。しかし、印象深いこの島の緑は、戦後、米軍が種を空中散布して育てたものだという。パパイヤも小ぶりの実をつけていた。

4時間にわたった見学を終えて、帰りは2時間半の飛行の後に埼玉の入間基地に着陸した。そこから帰宅途中の電車から見えた新宿の雑踏が、硫黄島の余韻のせいか、平和そのもの、しかも、やけにケバイ色にみえたことを思い出す。

その日から2週間後に、通産省基礎産業局アルコール課長の異動辞令を受けた。これは、今の製造産業局アルコール室長に当たるポストである。つまり、工業用エタノールの生産、流通、販売の総元締めである。

でも、エチルアルコール濃度95%以上の“専



米国側記念碑と米国海兵隊員



栗林中将が立て籠もったトンネル陣地

売アルコール”は、昭和12年に、航空燃料や軍用車のガソリン混合用としてスタートしたので、あながちこの研修と縁がない訳ではなかったと、今は、思っている。

ところで、気にかかっている事がある。“硫黄島”の読み方である。去年のクリントイーストウッド（76歳）の映画以来、「イオウジマ」

と発音されているが、確か、日本では、「いおうとう」と呼んでいたはずである。私が、これ以前、NEDOワシントン事務所長として駐在した一年目の1984年に、アーリントン墓地近くの“硫黄島モニュメント”を訪れた時に、IWO-JIMAの道路標識を見て、アメリカでは違う呼び方をしているナと思った記憶が強くある。



摺鉢山の頂上から米軍上陸海岸を望む